

第7回 防災ボランティア活動検討会

全体会資料

議事次第

資料1 参加者一覧

資料2 今年の災害にかかるボランティア活動について

資料3 事前意見

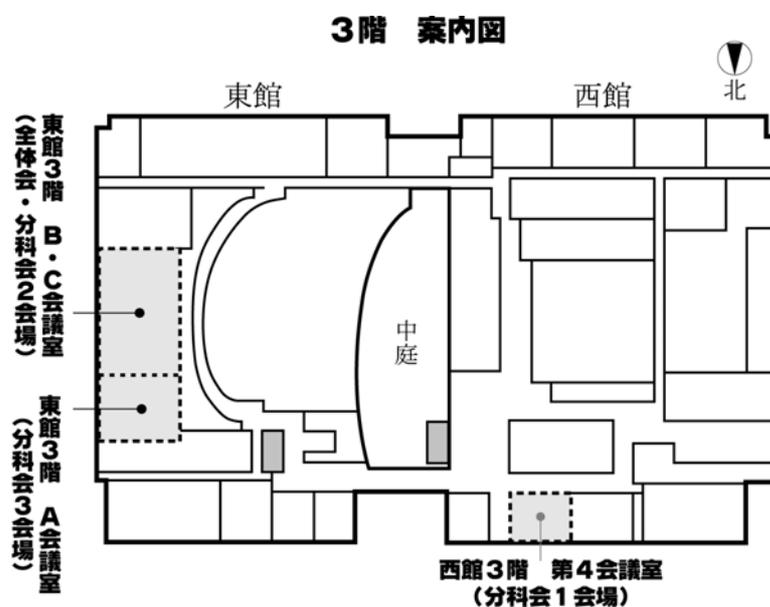
資料4 「防災ボランティア活動の情報・ヒント集」に関する意見

参考資料

防災ボランティア活動の情報・ヒント集

防災ボランティアの「お作法」集

寒冷環境下における防災ボランティア活動の安全衛生に関する情報・ヒント集（暫定版）



内閣府（防災担当）

平成19年8月26日

第7回「防災ボランティア活動検討会」

議事次第

平成19年8月26日(日)13:00～16:30

京都府府民総合交流プラザ(京都府京都市)

1. 開会(13:00～13:05)

- ・ 内閣府あいさつ
- ・ 全体会司会者等の紹介

2. 全体会(前半)(13:05～13:50)

今年の災害にかかるボランティア活動について

- ・ 話題提供1 能登半島地震災害におけるボランティア活動について
櫻井定宗氏(社団法人日本青年会議所石川ブロック協議会会長)
- ・ 話題提供2 新潟県中越沖地震災害におけるボランティア活動について
山岸孝博氏(中越復興市民会議代表)
- ・ 意見交換
- ・ 終了後、分科会移動

3. 分科会(14:00～15:20)

- ・ 分科会1「防災ボランティアの安全衛生について」第4会議室
- ・ 分科会2「県境を越える規模の大災害へのボランティアの広域連携」B・C会議室
- ・ 分科会3「防災ボランティア活動の反省・教訓と活動への反映」A会議室

4. 全体会(後半)(15:30～16:30)

- ・ 各分科会の報告
- ・ 全体での討議(次年度に向けての討議等)
- ・ 閉会(16:30)

平成19年8月26日

第7回防災ボランティア活動検討会 参加者一覧

内閣府（防災担当）

ボランティア活動者・関係者（五十音順）			分科会
1	市川 啓一	株式会社レスキューナウ 代表取締役	2
2	五辻 活	バルシステム生活協同組合連合会 災害対策専門員	2
3	上原 泰男	特定非営利活動法人 東京災害ボランティアネットワーク 事務局長	2
4	植山 利昭	川崎・災害ボランティアネットワーク会議 代表	2
5	宇田川 規夫	国際救急法研究所 理事長	1
6	岡坂 健	情報ボランティア	2
7	岡野谷 純	特定非営利活動法人 日本ファーストエイドソサエティ 代表理事	1
8	小野田 全宏	特定非営利活動法人 静岡県ボランティア協会 常務理事	2
9	鍵屋 一	特定非営利活動法人 東京いのちのポータルサイト / 板橋区職員	3
10	加納 佑一	神奈川県立保健福祉大学大学院	3
11	栗田 暢之	特定非営利活動法人 レスキューストックヤード 代表理事	2
12	沢野 次郎	災害救援ボランティア推進委員会 事務局長	1
13	寺本 弘伸	特定非営利活動法人 日本災害救援ボランティアネットワーク	2
14	中川 和之	時事通信社 防災リスクマネジメントWeb 編集長	3
15	洙田 靖夫	医師・労働衛生コンサルタント	1
16	南部 美智代	特定非営利活動法人 災害ボランティアネットワーク鈴鹿 理事長	1
17	蓮本 浩介	近畿福祉大学講師 / 元兵庫県社会福祉協議会職員	1
18	秦 好子	横浜災害ボランティアバスの会	1
19	福田 伸章	特定非営利活動法人 東京災害ボランティアネットワーク 事務局次長	3
20	松森 和人	特定非営利活動法人 ふくい災害ボランティアネット 理事長	3
21	宮本 秀利	特定非営利活動法人 島原ボランティア協議会 事務局長	2
22	村野 淳子	大分県社会福祉協議会 大分県ボランティア・市民活動センター	2
23	村林 康彦	山口災害救援（弘中氏代理）	3
24	山岸 孝博	中越復興市民会議 代表	2
25	山崎 水紀夫	特定非営利活動法人 NPO 高知市民会議 代理理事 / 高知県職員	3
26	山本 康史	三重県防災ボランティアコーディネーター養成協議会 議長	3
27	吉村 雄之祐	特定非営利活動法人 京都災害ボランティアネット 理事長	3

有識者（五十音順）			分科会
1	渥美 公秀	大阪大学コミュニケーションデザインセンター 准教授	3
2	小村 隆史	富士常葉大学環境防災学部 准教授	2
3	菅 磨志保	大阪大学コミュニケーションデザインセンター 特任教員	3
4	高梨 成子	防災＆情報研究所 所長	2
5	立木 茂雄	同志社大学社会学部 教授	3
6	干川 剛史	大妻女子大学人間関係学部 教授	2
7	丸谷 浩明	京都大学経済研究所 先端政策分析研究センター(CAPS) 教授	3
8	室崎 益輝	総務省消防庁 消防研究センター	2
9	山崎 美貴子	神奈川県立保健福祉大学学長 / 東京ボランティア・市民活動センター所長	2

オブザーバー（五十音順）		
1	渋谷 篤男	社会福祉法人 全国社会福祉協議会 全国ボランティア活動振興センター
2	阿部陽一郎	社会福祉法人 中央共同募金会
3	井上 倫孝	特定非営利活動法人 国際ボランティア学生協会

関係省庁（内閣府防災担当以外）		
1		内閣府 国民生活局 市民活動促進課
2	鷹見 恭平	総務省消防庁 国民保護・防災部 防災課 地域防災係
3		総務省 総合通信基盤局 総務課
4		国土交通省 河川局 防災課
5		国土交通省 総合政策局 建設施工企画課
6		厚生労働省 社会・援護局地域福祉課
7		文部科学省文 教施設企画部 施設企画課

話題提供（メンバー、関係省庁、オブザーバーを除く）		
1	櫻井 定宗	2007年度 社団法人日本青年会議所 北陸信越地区石川ブロック協議会会長

内閣府（防災担当）		
1	鳥巢 英司	政策統括官（防災担当）付参事官（災害予防担当）
2	伊丹 潔	政策統括官（防災担当）付企画官（災害予防担当）
3	渡部 元	政策統括官（防災担当）付参事官付補佐（災害予防担当）
4	藤田 亮	政策統括官（防災担当）付参事官付主査（災害予防担当）

事務局		
1	山本 耕平	株式会社 ダイナックス都市環境研究所 代表取締役所長
2	津賀 高幸	株式会社 ダイナックス都市環境研究所 研究員
3	渡邊 善明	株式会社 ダイナックス都市環境研究所 研究員
4	渡邊 俊幸	株式会社 ダイナックス都市環境研究所 研究員
5	江澤 陽子	株式会社 ダイナックス都市環境研究所 研究員補助

資料 2

今年の災害にかかるボランティア活動について

輪島市(旧門前町)

名称	3月27日～「輪島市災害対策ボランティア現地本部」を設置 4月3日「輪島市災害ボランティアセンター門前」と名称変更			
				
場所	(～4月4日) 輪島市門前町走出 輪島市立門前東小学校(旧櫛比小学校) (4月5日～) 〒927-2164 輪島市門前町道下サンセットパーク内			
TEL	768-42-1945 (9:00～16:00) メール info-vc@monzen.hikarinet.jp(4/11～5/26)			
本部長	輪島市社会福祉協議会事務局長 七尾幸子氏、4/5～赤坂氏中心			
活動期間	3月28日(水)～5月28日(月)			
活動日	活動内容		ボ 受 ラ 付 数	応 付 二 件 数 (ズ 受 対)
3月26日	月	災害ボランティアセンター設置のビラ張り、口頭説明		
3月27日	火	JCと連携し、センター設置の準備、13時～センターを開設		
3月28日	水	家の家財等の整頓、ブロック塀の撤去作業など	178	29
3月29日	木		299	38
3月30日	金	家具の運び出し・清掃・避難者応援グッズの作成など	311	
3月31日	土	灯籠の解体、ゴミ捨て作業、瓦礫の片付け、足湯の実施など	968	128
4月1日	日	屋内・屋外の片付け作業	1216	83
4月2日	月	家屋内外の片付け等	279	82
4月3日	火	瓦礫の撤去、清掃等の活動	553	63
4月4日	水	自衛隊の炊き出し支援、配食の手伝い、ボランティアセンター引越作業等 雪のため、11:30で屋外活動は中止	581	31
4月5日	木	ガレキの片付け等	259	54(42)
4月6日	金	屋内外の片付け、清掃を中心とした活動	81	45
4月7日	土	廃材をクリーンセンターへ運搬、ブロック壊し等 桜の花びらプロジェクト活動実施	326	27

				
4月8日	日	清掃、ゴミ運搬、片付け等の活動	379	34
4月9日	月	荷物の運搬、納屋・物置の片付け・運搬等	191	30
4月10日	火	ガレキ処理、うるうるパック配布、片付け、家具等の運び出し、ゴミの搬出	207	29
4月11日	水	ガレキ処理、家屋の清掃、家財道具の運び出し ゴミの一時集積場の確保、うるうるパックの配布活動	560	53(32)
4月12日	木	災害ゴミ処理、ブロック・土塀の取り壊し、子ども向け行事の手伝い等	286	42
4月13日	金	災害ゴミ処理、ブロック・土塀の取り壊し、子ども向け行事の手伝い等 高校生ボラおよび親子 100 名が参加	404	49(25)
4月14日	土	災害ゴミ処理、ブロック・土塀の取り壊し、子ども向け行事の手伝い等(300名の炊き出しほか)子ども70名、大人35名程度が参加	235	39(35)
4月15日	日	災害ゴミ処理、ブロック・土塀の取り壊し、子ども向け行事の手伝いなどの活動	248	39
4月16日	月	ゴミの廃棄、崩れた土蔵の土の回収、家財道具の搬出等 ニーズとのマッチングはポストイット方式に転換	79	30(21)
4月17日	火	壁・ガレキの処理、土嚢作りなど	181	42(22)
4月18日	水	廃材処理、荷物運び、ごみの分別、石とうろうの移動など	83	36(18)
4月19日	木	廃材処理、荷物運びなど	85	31(18)
4月20日	金	廃材処理、荷物運び、ガレキ片付け 民生委員と共にくるくるパックを持参、配布しながら各家庭を訪問など	116	33(19)
				
4月21日	土	道路の清掃、チラシの配布、お茶会の実施など	273	38(36)
4月22日	日	ガレキ撤去、家財運び、民生委員さんと区長訪問など	92	23(12)
4月23日	月	ガレキ運び、道路清掃など	101	31(16)
4月24日	火	ごみ回収作業、ガレキの運搬・廃棄	92	24(16)

4月25日	水	イベント準備、チラシ配り、木くずの運搬など 金沢辰巳丘高等学校の生徒さんがV参加(チラシ配布や 工作作業)	156	27(7)
				
4月26日	木	ゴミ回収、部屋の片付け、荷物の移動、屋根のシートか け等	57	33(17)
4月27日	金	ガレキの処理、荷物の運搬、イベントの準備など	67	23
4月28日	土	ガレキ処理、イベント手伝い、 ゴミの清掃など曹洞宗、 北陸学院高校ボランティアなどの 協力によりイベント実施 ・マジックショー ・落語鑑賞 等	114	17
				
4月29日	日	引越しの手伝い、ガレキの処理、家屋の片付けなど 33名の北電さんの協力で深見地区の仮設住宅への引越 しスタート 阿岸公民館(避難所)30日に閉鎖	91	31
4月30日	月	引越しの手伝い、おかゆ詰め、ゴミの撤去、家屋の片付 けなど	54	52(25)
5月1日	火	引越し、物資詰め、ゴミの撤収、家屋の片付け、 「花いっぱい運動」プロジェクト始動 仮設の談話室でお茶会実施、深見地区の仮設引越しお手 伝い	96	33(24)
				
5月2日	水	家財運搬、ゴミ処理、避難所清掃、片付けなど	36	30(9)
5月3日	木	引越し、ガレキ処理など	131	37(26)
5月4日	金	廃材土嚢詰め、クリーンセンターへの運搬など。 仮設住宅の敷地にこいのぼり設置。 あたらいいね引越しパッ ク館地区の仮設住宅に。 あたらいいね引越しパッ ク 仮設訪問	80	35(26)
				

5月5日	土	引越しの手伝い、災害ゴミの運搬、あったらいいね引越しパックの配布など	80	30(24)
5月6日	日	ゴミの積み下ろし、廃材の処理、イベントのチラシ配りなど	29	24(11)
5月7日	月	ガレキ・廃材の処理、仮設住宅のプランターに応援メッセージを貼付け(門前中 1・3年生)、仮設住宅でのお茶会(20名参加)など	167	17(10)
				
5月8日	火	ゴミの積み下ろし、イベントのチラシ配布など ボランティア受付窓口をプレハブ内に移動し、活動紹介と合流	38	26(8)
5月9日	水	家具の運搬。災害ゴミ捨て、ガレキ・廃材処理など。 お茶会開催	46	25(10)
		 <p style="text-align: right;">((道下の引越し))</p>		
5月10日	木	災害ゴミの処理、家具の移動、ガレキ処理、蔵の整理など	12	25(9)
5月11日	金	家電をクリーンセンターへ搬送など、	30	52(12)
5月12日	土	廃棄物の処分など 「ゴミ一掃撤去」活動(深見地区)実施 - ひのきしん隊と北電で対応	60	35(15)
		 		
5月13日	日	廃棄物処理等	67	36(23)
		 		
5月14日	月	あったらいいねパックの袋詰め	11	27(6)

5月15日	火	廃材の運搬等	81	35(23)
5月16日	水	家具などの片付け、仮設住宅への引越し、荷物の運搬など曹洞宗青年会による仮設住宅での行茶を実施	23	20(9)
5月17日	木	ゴミの片付け、廃棄など	20	19(5)
5月18日	金	災害ゴミの片付け、廃棄など	12	19(10)
5月19日	土	廃材の撤去、物資の運搬など 災害の状況を記録に残そうと 中学生がV活動	49	20(13)
				
5月20日	日	チラシセットの配布、ガレキ処理等	58	19(14)
5月21日	月	災害ゴミの片付け、仮設住宅の支援、物資配布等	29	14(9)
5月22日	火	ものの移動、ゴミ処理、あったらいいねパッケの配布	5	12(7)
5月23日	水	廃棄物の処理、引越し作業、資機材返却整理	25	14(10)
5月24日	木	仮設訪問、家具の移動、VC引越し準備	31	11(11)
5月25日	金	センタープレハブ撤去のための荷物運び出し	7	2(1)
5月26日	土	センタープレハブ撤去のための荷物運び出し	9	3(2)
5月27日	日	イベントの準備、実施、片付け	0	2(1)
				
				
5月28日	月	イベント片付け	18	2(1)
5月29日	火		2	
5月30日	水		0	
5月31日	木		0	

その後 輪島市社会福祉協議会 地元有志によって 依頼に丁寧に対応

6月27日(水)～ 復興シールプロジェクト始動

(輪島青年会議所・周辺青年会議所・輪島市・輪島商工会議所)

中間支援組織設立にむけて 不定期に準備会開催中

輪島市ボランティアセンター門前

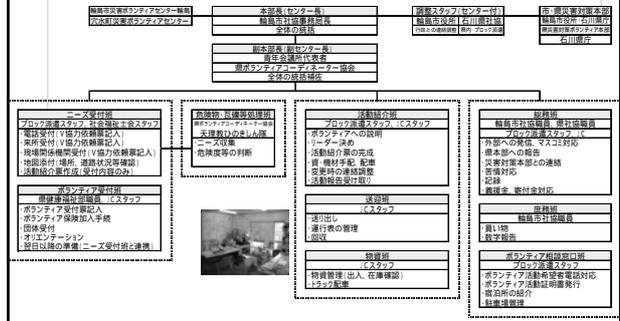


門前東小学校より 道下サンセットパークに移転
日本経団連1%クラブ企業より多くのご支援を頂きました。
目の前には、仮設住宅(150戸)が建てられました。

輪島市災害ボランティアセンター門前組織図

健康第一

体制&役割



活動紹介

桜の花びらプロジェクト活動



輪島市の門前東小、西小に、入学祝いや復興を応援する県内外のメッセージ入リカードを、満開の桜の木を描くように、飾り付けるボランティア



FM石川のご協力で多くのメッセージを県内各所より頂戴しました

活動紹介

ボランティア活動に参加する 高校生たち



週末のイベントに向けて、チラシ配布や工作のボランティア活動を行う、金沢辰巳丘高等学校の生徒さんたち

活動紹介

「花いっぱいプロジェクト」(門前)



仮設住宅に花をお届けする「花いっぱいプロジェクト」活動に参加する、北陸電力の方々。メッセージは中学生から



活動紹介

お茶会一つ、の実施

(復興に向けた見守り活動がスタート)



門前町の道下地区の仮設住宅の談話室で、「～甞(よりそう)の会」により、「行茶(お茶会)」を実施、定期的な活動へ

活動紹介
始業式応援パックで応援



活動紹介
仮設住宅への引越し支援活動



土砂崩れの危険性も伴っている深見地区にて、引越しのお手伝いを実施



活動紹介
生活道路をふさぐ石の除去作業



門前地区(兼横、小滝地区)

この地区の石垣の石は焼け石で、石自体がもろく、震災でくずれた石垣により、生活道路がふさがれてしまっている。



石の除去作業を行う北電の方々

活動紹介
廃棄物処理などの活動を実施



屋根のブルーシート掛けや家屋や赤紙が張られている家の片付け、土蔵の解体などの作業を行う「ひのきしん隊」(天理教のメンバーで構成)チームの方々。

活動紹介
記録に残すプロジェクト始動



「災害ボランティアセンターを記録に残していこうと、「災害ボランティアセンターの説明」や「各セクションの説明」、「活動現場の説明」を、熱心に耳を傾ける中学生たち



門前にて災害VC閉所式(5/27)



「復興の慶」が、橋市長から輪島市社会福祉協議会長らに伝達



曹洞宗大本山・總持寺祖院の復興祈願法要



沢、小松両市の消防音楽隊の合同コンサート



花火を楽しむ人々

復興シールプロジェクト



石川県立輪島実業高等学校 情報ビジネス科1年 川端 芽依さんのデザイン

<http://www.genkinoto.com>

中間支援組織設立に向けて

能登の暮らし再生会議(仮称)
能登の若いもんが震災を機に
地域や団体の枠を超えて 復興の物語
を作ろうと集まった

小さな地域のお年寄りや子どもたちの
生の声を発信

今後とも変わらぬご支援をお願いいたします。



門前サンセットパークの夕日

事前意見

防災ボランティア活動検討会事務局
(株式会社ダイナックス都市環境研究所)

1. 自由意見

国際救急法研究所 宇田川規夫氏

被災後の生活を支える活動を考える（刈羽村での活動から）

お年寄りや災害時要援護者に入れられ、事実被害にあう方も多いのであるが、一方被災前は家事にせよ、農作業にせよ立派にこなしていた方が多い。災害はそれらの活動を一時的に失わせるが、被災生活を支える活動は、いかにできるだけ早く日常に帰れるかをきちんと見据える必要がある。その点で今回経験したことから2点述べたい。

（炊事支援）

刈羽村の避難所への食事は自衛隊が担っていた。そのため住民の方は食事待つ存在であった。それは決して好ましい姿とは思えない。過去の被災地でもあてがいぶちの生活を余儀なくされる中から立ち上がるエネルギーを奮い起こすのは相当に困難なことが見て取れる。自衛隊が炊事施設を持っているからといって、すべてをやらねばならないのだろうか。

お茶会でこんなつぶやきを聞いた。「今日はてんぷらだったんだけど、自衛隊さんが作ったものは焦げていたり、うまく揚がっていなかったりで」もしも避難所の方と自衛隊とが共同で炊事をすればより良い食事の供給体制とともに被災者の方の日常へ戻る道へのスタートがきりやすくなると思う。

（日常生活支援）

同様の問題点を避難所のすごし方で感じた。日ごろしっかり働いている方々が、やることもなくぼんやりと寝転んでいる姿はやるせないだけでなく、体力的にも精神的にも衰えを誘発する。特に刈羽村のように日ごろ畑仕事をしている方々は、畑が気になって仕方ないようだった。しかし行っても仕方ないし、といった諦めが先にたち、行動になりにくかった。これを解決するため野良仕事への送迎ボラの検討もしたが人員的な問題もあり実現するに至らなかった。

実行するとすれば、必要な車とスタッフの確保が必要であるが、今回のような農村地帯での被災では生活基盤は畑や田んぼに有り、できるだけ早くそこに帰れるようにするための支援は絶対に必要なことだ。

高齢化率の高いところでは、高齢者も現役であることが多い。そのような地域では働き続けるための支援計画を早急に立てることが必要だと痛感した。

宮城県社会福祉協議会 北川進氏

現在の社協の置かれている状況を見ると、災害時において災害V Cに9割以上関わっておりその関わり方も様々になっている。それらの実態を踏まえ、社協との関わりをテーマに検討すべき部分もあるのではないかと。検討会は、いろいろな考えを持っているメンバーが参加しており、また、人数的にも多数になっているため意見の統一が困難。例えば幹事会的な役割位置づけるなど方向性について深い議論を重ねる場を作ってはどうか。

災害救援ボランティア推進委員会 澤野次郎氏

最近の災害ボランティア活動の成果と課題

私は能登半島地震、新潟県中越沖地震におけるボランティア活動は、新潟県中越地震の教訓にも学びながら、被災者に役立つ活動を行い、今後の活動の一つのスタイルを作ったと考えます。

主な点をまとめると、第一に被災地の県・市町村の判断で災害ボランティアセンター(以下、センターと略す)を設置し、被災地の意向にもとづく運営が行なわれる流れが定着したこと。第二にセンターの要員確保について広域な応援、とくに全国社会福祉協議会が応援のしきみを整えたこと。第三に被災地の混乱と渋滞を避けるために中継拠点(被災地外)からの日帰りボランティアバスが計画的に運行されたことです。これらは被災地における体制面での環境整備が進展した結果であると考えます。

以上の点をふまえて、検討すべき課題は次ぎの点です。

第一に被災地外からのボランティアの広域応援のあり方です。とくに被災地の県・市が被害規模を勘案して、ボランティアを県内募集に限定した場合に県外のボランティアはどう対応すべきなのかという点です。かつてのように被災地での体制がなかなか整わない状況下では、被災地外からボランティアが独自の判断で被災地に入り、活動拠点を作ってボランティアを募集する活動スタイルにも一定の意味がありましたが、被災地での環境整備が進展してきた今日の状況をふまえると、かけつけ型ボランティアと被災地との調整をどうするかという新たな問題をどう考えるかという点です。

第二にセンターの運営を応援する人員を安定的にどう確保するのかという点です。現状のしきみは社会福祉協議会の組織に依存しており、その職員に過度な負担を強いています。そこでセンター要員を派遣する意思と能力のある団体が何らかの形で集まって、より安定的なしきみが作れないかという点です。

第三に被災地でのボランティアの安全確保に関して、誰が最終的に判断し、責任を持つのかのルール作りです。

具体的な課題としては新潟県中越沖地震では、原子力発電所の安全問題、余震が比較的少なかったという条件のもとでの被災した家屋内での後片付けのあり方、炎天下の作業での安全管理のあり方等は、最終的に誰が、どの基準で判断するかというルールづくりです。私は、この分野に関しては、何らかの専門家による委員会を作ってはどうかと考えています。

そして足元の課題として忘れてはならないのは、被災地を支援するボランティア団体・グル

ープへの何らかの援助のしくみを考えることです。

もちろん災害ボランティア活動が自己責任にもとづき、自らの組織と資金において行なわれることが前提ですが、被災地にとってボランティア活動が不可欠となった今日の状況もふまえて、災害時のボランティア活動全体を資金的にも下支えするしくみが必要になってきているということです。

以 上

社団法人シャンティ国際ボランティア会（SVA） 関尚士氏

SVAでは、中越沖地震災害支援では2つの関わり方をしている。柏崎市災害VCへの人的派遣サポート（支援P）と「行茶（ぎょうちゃ）」で、避難所の高齢者への寄り添い声をひろう活動。特に、地域のお坊さんと地元を結びつけるための仕掛けや災害VCを通じた公的なサポートを行っている。これからのくらしの再建に、長期視点をもって地域の宗教者として参画していくことが課題と考えている。

練馬区区民防災組織 nerima-saigai.net 高橋洋氏

防災ボランティア活動検討会の参加者の皆様。そして主催者、事務局の皆様暑い中、大イベントということで、ご苦労さまです。今回は、開催地が京都なので、練馬の地百姓的小生としては、地侍諸氏との交流も含めて、ぜひ参加したかったのですが、あらかじめ予定されていた私用が重なり、欠席となりました。本当に残念です。

公私の近況をご報告します。

【練馬区福祉部の防災担当として】

本業の公務は、昨年度、危機管理室から古巣の福祉部にもどり、介護保険の仕事をしています。高齢者福祉は、予想以上に状況が切迫しているため、日々の業務に追われています。

そのような毎日であっても、福祉部の防災担当の取りまとめ役は、以前一緒に危機管理室で防災担当をしていた若手職員なので、今年度は介護保険課から選出された防災担当として、いろいろな職場から選出されている福祉部防災担当職員諸君とともに、練馬区福祉部としての要援護者対策を進めているところです。

練馬区福祉部は、日頃からボランティアセンター4か所を運営している、区の社会福祉協議会との関係も近く、この検討会の蓄積が生きます。ボランティアセンターの固有職員は、現地に派遣されての災害対策の経験もあり、意欲もあるので助かります。

ボランティア検討会事務局からいただく資料も、昨年内閣府の別の検討会で委員していただきました要援護者関係の資料も、以上のような本業に役立っています。

【地元の「減災ボランティア」とともに】

地元での防災ボランティア活動は、もともと家具固定等の「講習会」で活動していて最近旗揚げをした「減災ボランティア」である「建築防災”くまさんの会”」と一緒に、練馬区内で家具固定やガラス飛散防止の普及・啓発活動にとり組んでいます。これは、家屋の耐震補強などとともに、大切な減災活動なので、ようやく練馬区においても、この種の活動を行う集団が出現し、個人としても喜んでいきます。（別に、障害者・高齢者のお宅で家具固定等を行うボランテ

3,800 件/6,800 棟 = 55.9% つまり、このケースではだいたい半分くらいのニーズがある。
3,800 件/23 日 = 165 なので平均すると一日あたり、165 件のニーズがあり、
23,600 人/23 日 = 1,026 人 スタッフ分を適当に引くと、一日あたり約 1,000 人が取り組んだ。
1,000 人/165 件 = 6 人 つまり平均で 1 件あたり約 6 人で取り組んだことがわかる。

山口県美川町(水害)の場合でやってみると、床上浸水 172 棟、床下浸水 29 棟。

合計 201 棟	まるめて 200 棟
ボランティアニーズ総数 249 件	まるめて 250 件
ボランティア受付登録延べ人数 1,592 人	まるめて 1,600 人

(活動日数 12 日間)

250 件/200 棟 = 125% つまり、このケースでは床上・床下浸水家屋以上のニーズがある。
250 件/12 日 = 20.8 なので平均すると一日あたり、20 件のニーズがあり、
1,600 人/12 日 = 133 人 スタッフ分を適当に引くと、一日あたり約 120 人が取り組んだ。
120 人/20 件 = 6 人 つまり平均で 1 件あたり約 6 人で取り組んだことがわかる。

う～ん、奇しくも水害の場合、二例だけですが、6 人という目安が一致しましたね。

これがある程度他の災害ボラセンでも共通する話であれば、最初から、目安として 3～6 人でチームをつくらせて待機しておくことも可能になる。また募集と開設期間の検討をつけることができます。

特定非営利活動法人千葉レスキューサポートバイク 藤田治氏

千葉 R B では中越沖地震の柏崎で新潟 R B の支援として活動した。

他のバイク隊も多く救援に駆け付けており、連携が課題と考えている。また、千葉県災害ボランティアセンター連絡会メンバーとして社協職員と同行する形で活動を行っている。

今回は地元の防災訓練があり欠席です。

私に関わっている市民防災で、皆さんに紹介したい事例が2例あります。

一つは、東京消防庁が平成16年度から設置している「地域の防火防災功労賞」制度です。これは地震や風水害などの被害を軽減することを目的に、地域の取り組みを審査、表彰し、防火防災の普及啓発を図るために設置された制度です。

【参考】自主防災組織と安全安心なまちづくり

第11回防災まちづくり大賞の応募事例より

東京駅・有楽町駅周辺地区帰宅困難者対策地域協力会（東京都千代田区）

平成16年に周辺の事業所62社が中心となって設立され、千代田区からは「東京駅・有楽町駅周辺地区帰宅困難者対策地域協力会」として、自主防災組織の位置付けを受けて活動を行っている。大地震発生後の「帰宅困難者の対応について」という大きな問題を解決するために、「ビジネス街らしい防災」、「事業所間の共助」という考えを取り入れ、地域企業が連携し、災害時対応マニュアルの作成や帰宅困難者発生時に備えた食料等備蓄、全国で初の外国人を対象にした帰宅困難者避難訓練の実施、「丸の内消防防災マガジン」の各企業への配布、「QRコードシステム（二次元バーコード）」及び「携帯電話（QRコード読み取り機能付き）」の活用の実証実験を目的としたQRパトロール等行っている。

東北福祉大学地域減災センター（宮城県仙台市）

東北福祉大学地域減災センターが中心となって、産学官民連携・協働による委員会を組織し、継続的に減災活動・学習を展開している。こども・若者・高齢者がともに学び、考えあう機会を創出するための「防災マップづくり」や地域への出前講座、大学祭における防災ハンドブックの配布、防災グッズ等の展示、学校・地域における災害時要援護者体験講座の実践、「災害時要援護者マニュアル」の作成等を行っている。

千葉県立市川工業高等学校 建築科耐震研究班（千葉県市川市）

建築科3年生の生徒たちが、教科書に載っていない耐震診断活動について、更に一步踏み込んだ学習で木造住宅耐震診断ボランティア活動を行っている。また、生徒主体の市民公開講座で、補強工事の実例を交えながら地震倒壊の不安を解消する活動を行ったり、地域の信頼できる大工さんのネットワークづくりを目指す耐震補強の公開実験を行っている。その他、市川市建築指導課や学会、大学等と連携して、耐震壁の耐力実検の実施や全国的なシンポジウムでの研究発表を行うとともに、市主催の防災講演会で危険な事例報告など、耐震補強の普及を図る活動を行っている。

防府ノ防災ネットワーク推進会議（山口県防府市）

まちづくりの市民活動集団から地域防災を指導できる人材を育て、防災に関わる機関・組織を側面から支援することを目的に、住民参加型まちづくり活動のワークショップを進めている「時空の樹会（トキノキカイ）」と防災教育を専門に研究している山口大学瀧本助教授が共同で活動を進めている。活動は、各種災害図上訓練のスタッフとして参加したり、小学校の総合学

習の時間でフィールド調査・成果発表等の企画・運営を行っている。これらの活動から、総合学習を経験した小学生が探検隊を結成し、防災以外にも地域まちづくり活動を行うほか、地元コミュニティFMが「市民活動情報」として発信するなど様々な方面に展開している。

川西地区地域づくり推進協議会（香川県丸亀市）

平成12年に本協議会内の総務部会に防災担当を設置して以来、様々な活動を展開している。具体的には、ウォーキング大会と連動した防災フェアの実施、各自治会がテーマをもって自主的に開催する防災訓練の実施、大鍋による汁等作成訓練となぞらえた土器川芋だき大会の実施、防災リーダーの認定証制度の創設など様々な活動を行っている。また、香川大学ならびに企業と連携して「防災の手引書」を作成して全戸に配布したり、災害発生時の情報伝達と平常時の防犯パトロールに使用するふれあい防災ネットワークを構築している。

東京都電気工事工業組合豊島地区本部本郷支部（東京都文京区）

日頃から町会や地域の団体に防火防災情報を提供している東京都電気工事工業組合豊島地区本部本郷支部が、平成17年から毎年本郷消防署管内の町会の高齢者等災害時要援護者に対して、住宅用火災警報器を寄贈・設置している。設置の際は、信頼関係確保のため、本郷支部独自で「取り付けに関する留意点」を作成、活用するとともに、必ず町会役員と消防職員の立会いを得ながら実施した。設置した住宅用火災警報器は、設置工事した地元電気工事業者が責任を持って、毎年点検を実施し、作動状況を確認して維持管理している。また、毎年継続して寄贈・設置していることから、地域住民の住宅用火災警報器設置の気運が管内全体に高まってきている。

桜丘一丁目町会（東京都世田谷区）

長年の夜警活動に加え「災害時高齢者助け合いネットワーク」づくりを進めている。

災害時の行動を効果的にするため要援護者は要援護者を定期的に訪問し、お互いの信頼関係を築いている。車椅子介助や応急救護等の講習を実施して、ブロックリーダーと呼ばれる要援護者の意識啓発を図るとともに要援護者との関係を明記した助け合いマップを作成し、要援護者の了承のもとにブロックリーダーに配布している。また、車椅子・リヤカー・担架等を独自に購入し、随時管理を行っている。

深川災害時支援ボランティア（東京都江東区）

平成8年から、手話通訳者・聴覚障害者が災害時支援ボランティアとして登録すると共に「助ける側」として、普通救命講習、リーダー講習に参加し、リーダー的役割を担っている。また、ボランティア自らが聴覚障害者に対する災害時の意思疎通手段とした手話カードを作成するとともに、手話カードを活用した障害者対象の防災訓練を実施する他、地域行事に積極的に参加するなどしながら意見を取り入れ、より見易いものに改善している。

自主防災活動の維持・強化をどのように進めていくか

それには、教育PTA活動、福祉活動、環境保護活動、青少年健全育成活動、防犯活動、地域のお祭り行事などと自主防災活動とを組み合わせることで日常性を大事にしながらか、しかも楽しみながら実践していくことが大切である。

やらなければならないことが沢山ある

災害全般への対応が求められている。

災害予防の観点も取り入れた活動が求められている。

連携・協力が求められてる。

自主防災組織の活動を担う人材育成が求められている。

イベントのマンネリ化を防ぐ六つの「力」

「協力」「資力」「知力」「体力」「気力」「魅力」を組み合わせることで地域の活力をどう引き出していくかが鍵。

参考資料

「地域の安全・安心を実現するために」地域の安全・安心に関する懇話会報告書

「第11回防災まちづくり大賞」総務省消防庁・(財)消防科学総合センター・

(財)日本消防設備安全センター

「コミュニティ」 138 (財)地域社会研究所

二つ目は、大阪のNPO法人びーす（障がい児の家族を支援する団体）の活動です。東京YWCA板橋センターは板橋区の補助金を得て、平成15年度より障がい児通所訓練事業を実施しており、親の会のメンバーと災害時に備えて準備を進めているところです。その中で、びーす理事長の小田多佳子さんよりご紹介のあった`びーすワッペン`をキッズガーデン（東京YWCA板橋センターでは障がい児通所訓練事業をキッズガーデンと名づけました）でも購入することにしました。



助けてくれる人たちへ

これを見たら
いざという時 助けてください

災害時要援護者が持っている「ワッペン」と「ワッペン」です。
避難手帳、防災手帳、防災手帳、防災手帳などのある人や子ども、高齢者、妊婦、乳幼児、外国人などが利用しています。

このワッペンをしている人・子どもを見かけたら…

防災ワッペン

避難などの発生づくりに備えていることを周囲に伝えることが目的。自らコミュニケーションをとることが何より大切です。もし見かけた一人での対応はできません。要援護者であることを知らせる。避難場所へ行くことができます。確認が済んだら、安全な場所へ戻ります。

この手帳を提示されたら…

防災手帳

避難した人は、避難場所がわかりやすい！
一人で避難しやすい！
見かけがわかりやすい！
正しい情報が伝わる！
などに使われています。

災害時要援護者とは… (必要な情報を迅速かつ的確に把握し、自らを守るために安全な場所に避難するなどの「災害時の一連の行動をとるのに支援を要する人々」です。)

手帳やワッペンには、本人のデータなどが記載されています。それを参考にしてください。



災害時要援護者の人たちへ

いざという時
「上手に助けてもらえるよう」
準備しておきませんか？

防災ワッペンの裏側

※写真も、防災ワッペンが写すように印刷されています。

※写真も、防災ワッペンが写すように印刷されています。

※写真も、防災ワッペンが写すように印刷されています。

※写真も、防災ワッペンが写すように印刷されています。

防災手帳の内側

※写真も、防災ワッペンが写すように印刷されています。

※写真も、防災ワッペンが写すように印刷されています。

※写真も、防災ワッペンが写すように印刷されています。

※写真も、防災ワッペンが写すように印刷されています。

防災手帳/ワッペン/キーホルダーは有料配布しています。ワッペン200円、手帳200円

TEL: 03-5221-0100
NPO法人 びーす
〒111-8521 東京都文京区湯島1-18-18
TEL: 03-263-4086 FAX: 03-263-6861

びーす

それぞれの立場で、減災対策に取り組んでいる市民の活動が皆さんに伝わればうれしいです。

平成 19 年新潟県中越沖地震での情報支援活動の状況報告

「柏崎市災害ボランティアセンター西山支所」(以下、「西山ボラセン」)での「広域災害情報共有システム」(W I D I S) 地図情報システム¹<http://daidai.seiryo-lab.jp/chuetu-oki/top.html> を利用した情報支援活動については、福岡県社会福祉協議会の調査チームがローラー作戦で調査した旧西山町全域の応急危険度判定結果の赤・黄紙が貼られた家屋のデータ約 1000 件を情報担当ボランティア 5 人で 2 日かけて W I D I S に入力しました。

さらに、赤・黄紙が貼られた家屋でボランティアが活動可能か否か、可能であればがどのような形で活動できるのかを判断することが可能な建築士が構成員となっている専門ボランティア団体が調査チームとなり、現地で赤・黄紙が貼られた家屋の詳細な調査を行い、また、家屋の家主からボランティア依頼があれば、その内容を携帯電話のカメラで撮影した現地の画像を添付して(メールがストックされる)システム²<http://www.verdanet.org/kawasaki/htdocs/> に現地からメールで送り、そのメールを受けて情報担当のボランティアが、メールを見やすい形に Word で成形し、W I D I S の電子国土の西山ボラセンからボランティア依頼先の家屋までの広域地図と、ボランティア依頼先の家屋周辺の細密な地図をカラーレーザープリンタでプリントアウトして、ボランティア・ニーズ班に手渡し、対応を急ぐボランティアニーズであれば、即座に、マッチング班を通じてボランティアを現地に派遣するという方法を試験的に行ってみました。

その結果、赤・黄紙が貼られた家屋で安全確認を行った上でボランティア依頼のあったものについては、その日のうちに対応するという形でボランティアのコーディネーションのスピードアップが図れました。

しかし、このような形でのニーズ対応の仕方を一部で行なったために(1日あたり 4,5 件)、西山災害ボラセン全体のボランティアコーディネーションにおいて、混乱をもたらすこともあったために、2,3 日でこのような W I D I S によるボランティアのコーディネーションを中止しました(その他にも、2,3 の要因があったのですが、それについては、京都での検討会でお話できればと考えています)。

また、W I D I S に入力された各家屋についての 1000 件近い情報は、個人情報を含むために、その情報の取り扱いを、西山ボラセンと「柏崎市災害ボランティアセンター」(「本所」)の設置・運営主体である、柏崎市社会福祉協議会としては慎重に行なわざるをえず、結局、今後の使用方法としては、ボランティアニーズ対応済みの家屋のデータを W I D I S に入力して、記録し、今後の被災者対応や復興に役立てるといった使い方になると思います。

その具体的な運用方法について柏崎市社協と協議するために、昨日 12 日の夜、長岡に新幹線で入り(現在、長岡のビジネスホテルに宿泊中)、今日 13 日に、柏崎市の市街地の本所に行き、14 日に帰宅する予定になっています。

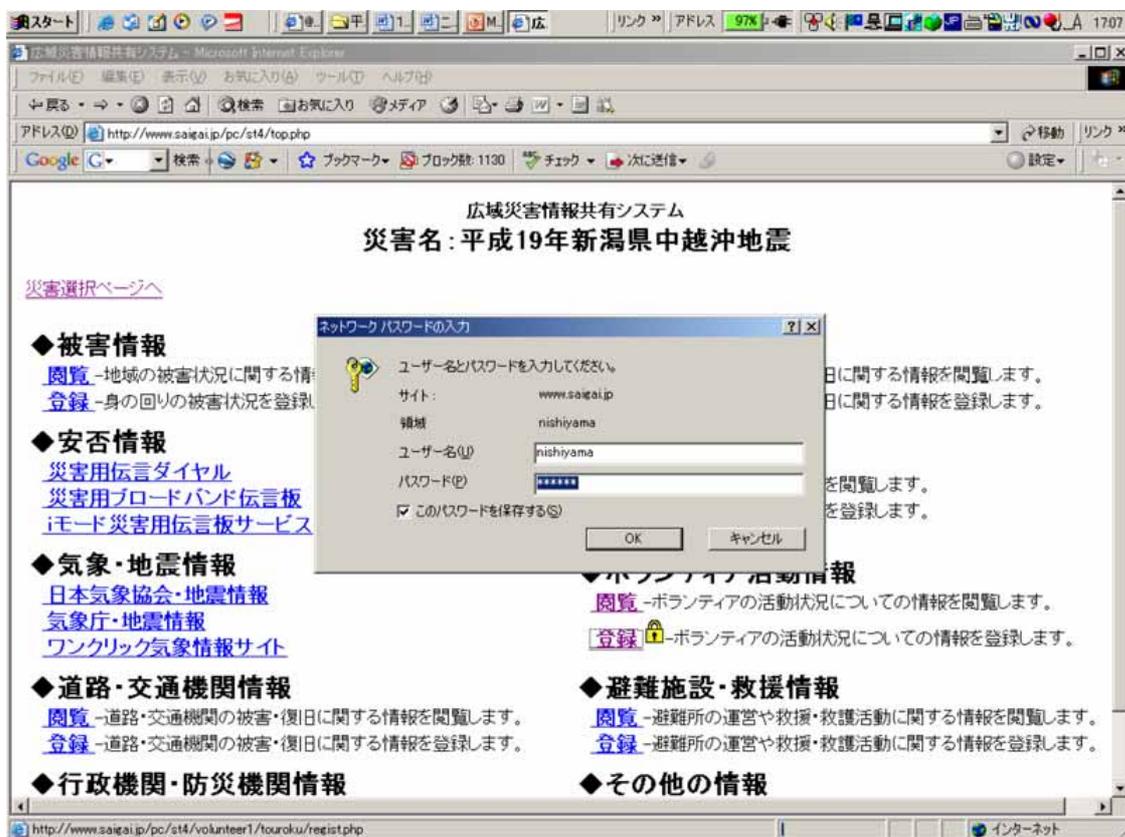
¹ (アクセス制限をかけているので、現在は、ID と PassWord を入れないと見られません)

² (アクセス制限をかけているので、現在は、ID と PassWord を入れないと見られません)

ところで、今回の西山ボラセンでの情報支援活動において明らかになったのは、W I D I S 地図情報システム <http://daidai.seiryo-lab.jp/sakumoto/daidai/top.html> (一般公開用) に現地の調査チームがローラー作戦で調査し携帯電話を通じて送ってきた結果を、災害ボランティアセンターの情報担当ボランティアが入力することで、被災地域の被災家屋の個々の状況や分布についての詳細なデータベースが構築され、その情報を被災地の支援活動にあたる関係機関・組織・団体・個人の間でW I D I S 地図情報システムを利用して共有することができ、各災害ボランティアセンター間のボランティアコーディネーションに役立てることができる可能性が見えたということです。

例えば、刈羽村の中で旧西山町に近い被災家屋の持ち主がボランティアを依頼した場合、ボランティアの人数が少ない場合や刈羽村災害ボランティアセンターが対応できない場合に、隣の西山ボラセンがW I D I S 地図情報システムに入力された当該家屋に直接ボランティアを派遣してニーズ対応を行なうということができると考えられます。

さらに、被災地の災害ボランティアセンターを被災地外でバックアップする「災害ボランティア支援センター」(仮称) が設置される場合、被災地の各ボラセンの調査チームが集めた被災家屋の状況やボランティアニーズについて情報を、各ボラセンからW I D I S 地図情報システムに迅速に入力すれば、各災害ボランティア支援センターが、それを随時チェックして、ボランティアの派遣先を個々のボランティア依頼世帯に直接ピンポイントで派遣するということも可能だと思えます。





裏面にボランティアセンターとボランティア依頼先の広域地図をプリントアウトし、ニーズ班に渡す。ニーズ班→マッチング班→ボランティア派遣

http://www.saga-pc.jp/~M/volunteer/View.php - Microsoft Internet Explorer

http://www.saga-pc.jp/~M/volunteer/View.php

地域別表示へ

前ページへ 次ページへ

No	詳細表示	登録日時	該当場所	情報区分	情報の題名	情報源	情報入手日	情報有効期限	情報内容	地図表示
1010	[詳細]	2007-08-21 16:02:42		ボランティア活動報告	ボランティア活動報告	柏崎市災害ボランティアセンター 西山支所活動報告(8/21)	2007-08-21	2007-12-31	8月21日(火)の柏崎市災害ボランティアセンター西山支所の活動状況は、以下の通りです。 ○ボランティア依頼件数 5件 ○ボランティア活動実人数 12人 [詳細]	--
1009	[詳細]	2007-08-20 16:45:50		ボランティア活動報告	ボランティア活動報告	柏崎市災害ボランティアセンター 西山支所活動報告(8/20)	2007-08-20	2007-12-31	8月20日(月)の柏崎市災害ボランティアセンター西山支所の活動状況は、以下の通りです。 ○ボランティア依頼件数 12件 ○ボランティア活動実人数 7人 [詳細]	--
1008	[詳細]	2007-08-19 16:05:38		ボランティア活動報告	ボランティア活動報告	柏崎市災害ボランティアセンター 西山支所活動報告(8/19)	2007-08-19	2007-12-31	8月19日(日)の柏崎市災害ボランティアセンター西山支所の活動状況は、以下の通りです。 ○ボランティア依頼件数 10件 ○ボランティア活動実人数 46人 [詳細]	--

防災ボランティア活動の進化のなかで見えてきた「更なる課題」について

(1) ボランティア活動の前進

中越の地震から新潟・福井・舞鶴・豊岡・宮崎の水害そして北陸の雪害、今年に入ってから
の能登や中越沖の地震、災害の世紀といわれるほどに災害が相次ぐなかで、防災ボランティア
活動は、そうした災害に鍛えられながら追いかけられながらも「着実に前進していること」を、
まずはみんなで確認し確信としなければならないと思う。

ボランティアセンターの運営、専門的ボランティア活動のひろがり、ボランティアに対する
健康管理を含む啓発、ボランティア活動への後方支援、ボランティアコーディネーターの系統
的育成など、ボランティア活動は日々前進している。

能登から中越沖と続く活動をみても、第1に、マニュアル等の整備や人材（社協の支援Pな
ど）の派遣による、ボラセン運営の標準化がはかられていること、第2に、ボランティアに対
する規範の周知や啓発により、ボランティア活動の質の向上と安全管理がはかられていること、
第3に専門的なボランティアの参画と被災者ニーズへの細やかな対応のなかから、ボランティ
ア活動の専門化がはかられていること、第4に情報支援システム（ホームページを含む）など
による、ボランティアの後方支援の充実がはかられていることなど、教訓として普及すべき成
果が無数に確認できる。

こうした成果は、ボランティアの皆さんの現場での涙ぐましい活動の上にもたらされたもの
であるが、同時に内閣府の検討会や消防庁の協議会さらには社会福祉協議会の研究会などでの、
意見交換やアウトプット（ヒント集や運営マニュアルど）によりもたらされた、と評価できる。
（もっとも、それがどこまで徹底されているかについては、検討会における議論と現場での検
証が欠かせないが・・・）

(2) 新たな課題の整理とその克服

とはいうものの、前進しているからこそその新たな難問が生まれている。ボランティアセンタ
ーやボランティアバスなどは、その代表的な成果であるが、そのマニュアルなどによる形式的
な展開にこだわるあまり、被災者や被災地のニーズに臨機応変に配慮するという初心を見失う
傾向もある。ボランティア活動をボランティアセンターの運営に矮小化するという狭い考え方
もみられる。今一度、「現場を大切にする、被災者を大切にする、そして仲間を大切にする」と
いうボランティアの原点を確認することも、必要である。
能登や中越沖で私が感じた課題をいくつかあげておこう。

(3) 危険度判定と後片付け活動

応急危険度判定で黄色紙が張られたところに片づけに入ることについて、安全対策を確りと
る(ガイドラインを作成)ことを前提に、OKが出ました。そのことが被災者の復興のスピードを
飛躍的に高める結果を生みだしている。がしかし、ボランティアの安全管理という視点から、
「要注意」建物への立ち入りについての、安全管理指針の作成が急がれる（中越沖ではとりあ
えずのガイドラインが作成されているが・・・）。

(3) 物資やマンパワーの需給調整

ボラバスは定着したが、それによる組織化されないボランティアの現場への殺到は混乱を生んでいる。他方で、その混乱をさけるために「県外ボランティアお断り」のメッセージがだされるが、それはボランティアの善意をそぐことになっている。ニーズとシーズのミスマッチが各所で発生(それは救援物資のミスマッチとよく似ている)しており、ボランティアの需給調整をいかに図るか、大きな問題と痛感している。人もものも被災外で集積分配するコントロールシステムが必要ではないか。いずれにしろ、物資を被災地に一斉に送り込む問題は今回も発生した。豊岡方式などがただしく継承されなかったといえよう。救援物資お断りかどうかという二者択一的な問題として受け止めるのではなく、被災者のニーズにいかに細やかに応えられるか(被災者のニーズをいかに汲み上げるか)という視点から、この問題は議論しなければならない。

(4) 他の団体や行政との連携

ボランティと消防団との連携が大きく進みつつある。ボランティアと建築士との連携も進みつつある。とくにボランティアと消防団との連携(これをボ消連携という)は、古い地域密着型の組織とあたらしい広域応援型の組織が力をあわせることのメリットが明らかになった例として、高く評価できよう。その他、地元の保健士さんとの連携も進んでいる。他方で、自衛隊中心の支援活動が定着しつつある中で(中越沖では自衛隊1日4000人にボランティア数百人)、自衛隊が焚き出しや風呂はともかく、各被災者の御用聞きやコンサートのイベントもするようになって、ボランティアの「出る幕」が少なくなっている。その結果が、ボランティアはまにあっていますというメッセージにつながりかねない。これについては、市民力をどう高めるかという視点から、ボランティアと自衛隊の協力・分担関係を見直す必要がある。

(5) ボランティアセンターの運営

社会福祉協議会を軸としたボラセンの運営は、社協のご尽力もあって定着化しつつある。それはそれで高く評価しなければならないと思う。しかし、日赤や専門的ボランティア団体その他の関係性や連携性の視点からみた時、それで果たしてよいのかという疑念も残る。他方で、企画運営、安全管理、ロジ担当、ニーズ調整、行政連携、専門支援、広報担当など、ボランティアセンターのシステムの見直しも、必要になっているように思う。ボランティアの健康管理あるいは安全管理の専門家の常駐も、焦眉の課題となっている。

(6) 検討会の目標課題の再設定

検討会の課題としては、ボランティア内部に向けるものと、ボランティア外部に向けるものがある。「お作法集」というキーワードにみられるように、いままでは内部に目が向けられてきた。それはそれで大切で、安全管理のヒント集などがつくられたことは、素晴らしいことだと思っている。しかし、本来は外部に対しても目を向け、ボランティア活動の環境整備をはかっていくことにこそ、もっと力を注ぐべきではないかと思っている。ボランティアの経済的基盤、技能的基盤などの整備をいかにやるのか。いまだに安いマンパワーとしてボランティアを低くみる傾向があるなかで、ボランティアに関わる制度の整備にむけ、力をあわせることも大切ではないか。

防災ボランティアの情報・ヒント集に関する意見

防災ボランティア活動検討会事務局
(株式会社ダイナックス都市環境研究所)

神奈川県立保健福祉大学大学院 加納 佑一氏

災害ボランティアセンターの運営ですが、外部のボランティアを基本に考えているように感じました。もともと地元にあるボランティア団体との連携・協働もコーディネーターの1つの重要な役割になってくると思います。最終的に地元に残る人達のことを考えてセンターを運営していく必要があると考えています。

宮城県社会福祉協議会 北川 進氏

運営論に入る前に「なぜ災害ボランティアセンターが必要か」に触れてはどうか。どこのマニュアルもそうだが運営が主目的になっており、そこに関わる意義や地域性の違いの理解などを含めた、設置・運営の真意に触れてはどうか。ここが抜けると単なる組織運営主義になってしまい、「被害者の自立支援」にならない気がする。

情報ヒント集に限らない話ですが、社協そのものをもう少し理解する必要があるのではないかと。災害ボランティアセンターそのものは決して社協だけで行うものではないことは誰しも承知のことであると思うが、被災地では事実9割方、ほとんどの市町村社協がボランティアセンターの中心的役割を担っている。また、これまでの被災地でのトラブルを見ると、各々の社協の性格(職員・役員の質も含め)に要因がある部分も大きいと感じる。ボランティアセンター閉鎖後も引き続き地域住民や組織と"ボランティア・福祉"というキーワードでつながっていくのが、社協であることを考えた時、この検討会でも共通理解を固めた上で、情報・ヒント集などに反映させていってはどうか。

社協論を議論するということではなく、社協の仕組みがバラバラ複雑であったり、日頃の活動や組織形態が各々違うことなどを知ってもらうということ。

近畿福祉大学 蓮本 浩介氏

災害 VC の運営については、オペレーションの話だけでなく、その前段となるリソースの話。資金は、最終的にそれをどこから調達したのかなどを追加した方がよい。

三重県防災ボランティアコーディネーター養成協議会 山本 康史氏

別紙添付広域支援部会があるので、そこを中心に、ということになるかもしれませんが・・・遠隔地からの支援システムについて、情報整理をした方がよいと感じます。

特に、人材派遣のシステムについては、現在存在しているシステムの設立背景や趣旨、具体的な内容などを整理した情報集があった方が、被災地の受入側コーディネーターが惑わずに連携できるのではないのでしょうか。

遠隔地からのボランティアバスの実施の仕方についても、もう一度そのあり方について整理を行って見た方がよいと思います。

ボラバスを、ボランティアを現地に送り込むための、単なる交通手段として捉えるのではなく、被災地外にコーディネート拠点を置く、ボランティア募集・受付・派遣のサテライトセンター機能として再認識し、バスはその手段のひとつと捉え、被災地外や移動行程中でのボランティアへのオリエンテーションやボランティア同士のコミュニケーション、チーム編制や作戦会議の場とすることで被災地センターの負担軽減にもっと寄与できると考えます。

